

# D・トランプと グローバリゼーション・ファアティーン

山内 亮史

一体アメリカはどうなってしまったのだろうか。弱ったとはいえ、世界で最も強大な権力を握るアメリカ大統領に、ドナルド・トランプである。あの滅茶苦茶な言動から泡沫候補と見ていたが、あれよあれよの間に当選してしまった。

私は大学生だったが、最初にアメリカに行った一九六四年一〇月は、ケネディが暗殺された後の大統領選挙の最中であり、民主党はジョンソンで、ケネディ路線の継承を訴えていた。対する共和党はゴールドウォーター。南部保守層を支持基盤に反共、保守主義、人種差別の政策で、結果は確かジョンソンの三分の一程度の得票率しかなかったと思う。私は、後に彼らはなぜあれだけヴェトナム戦争にのめり込んでしまったのか大きな疑問を抱え込んだが、ハンフリー副大統領や、ケネディチームであった弟ロバート・ケネディ、マクジョージ・バンデイ、セオドア・ソレンセン、アーサー・シュレジンガージュニア、そしてケネス・ガルブレイスなどのリベラルな言説に大きな影響を受けた。当時、東部ボストン近郊で、様々な人々と通訳の近藤正臣氏（後に大東文化大学教授）を介してかなり突っ込んだ意見交換を行ったが、総じて中間層の知的水準の高さを感じたものだった。そしてそれが

私のアメリカ観のその後の基準となった。リベラルの底力である。

今回のトランプ勝利は、エマニュエル・トッドの翻訳者である堀茂樹氏によると、「白人中間層が、トランプというトランプデモ人物を使って、クリントンのなものを、NOを突きつけた」結果である（『日刊ゲンダイ』一一月一八日）。それによると、日本のメディアが報じているように、必ずしも白人貧困層が投票したわけではなく、トランプ支持の中心は米国の年収の中心値とされる五〇〇万〜九九九万円の層であったという。

われわれは、これまでファシズムがその社会的背景の側面として「中産階級の革命」と呼ばれる面があったことを知っている。小さな工場主、小売店主、小土地所有者、自作農、軍人、教員、官吏、下層サラリーマンなど、広汎な小市民層が経済的没落不安を抱える状況である。

この状況は、既成の秩序、制度、組織不信を呼び、政治的無差別観を生む。「みんな同じだ。どうせろくなことはない」という感情が拡がると、「一番露骨に、一番心臓強く振る舞うやつが勝つことは当たり前」で「道徳に代わって、それこそ無理が出て来る」（丸山眞男）。強力なリーダーによる、事態を単

純化した決断と実行に期待が集まる。ポピュリズムである。

加えて、イギリスのEU離脱に連動するグローバリゼーション・ファアティーン（疲労）がある。新自由主義的なグローバリズムは、人・物・カネの自由移動のために国家のレギュレーション（規制）を不用とする。結果、地球規模のプロレタリア化が起り、大量の移民・難民を発生させ、格差と貧困、差別と排除が国内外に拡大してゆく。日本においては、TPPのように新自由主義とグローバリズムに走りながら、全く真逆の「日本を取り戻す」という安倍政権が一定の支持率を維持できるのは、ナショナルリズムが当面不安な個人のアイデンティティを慰めてくれるからである。

反グローバリズムは、このようなトランプを押し上げた波長と、サンダースを支持した若者たちの主張する社民主義的波長が、拮抗しつつ現れる。イギリスのEU離脱とスコットランドの独立志向、フランスの極右国民戦線の台頭、イタリアの五つ星運動、スペインのポデモス…。この潮流の中で、ドイツのメルケルの国際協調は厳しい試練に立たされている。

宗教、民族、国家、使い古されたこれらの孤独と、不安に投げ出された民衆の寄る辺は、必然的に不寛容と戦争につながる。「資本主義の終焉」論を裏付ける材料に事欠かないが、新国家主義のもと、IT、核、宇宙、自然などの軍事化という市場創造で、しっかりと利潤の確保に向かうだろう。「平和と希望の組織化」をどう創り出すべきか、私たちの構想力と実践力が試されている。

へやまうち りょうじ・旭川大学学長